第10回山岳スキー競技日本選手権大会に役員スタッフとして参加して

2015.4.8

広島県高体連登山専門部　西部伸也

　2015年4月4日～5日、長野県小谷村栂池で開催された第10回山岳スキー競技日本選手権大会に役員スタッフとして参加させてもらった。役員スタッフは、日山協役員の他には、地元の長野県ならびに北信越地区の方々が務めるのだが、遠方の私が加えてもらったのは、前年の11月に広島でアジア山岳連盟創立20周年記念行事が開催された折、それに参加していた長野県・大西浩さん（長野県山協理事長・全国高体連登山専門部副部長）とお話しする中で山岳スキー競技会のことが話題になり、大西さんから「旅費までは出せないが、宿泊は面倒見れるから、役員スタッフとして来ないか」と誘われたからである。以前から日山協の月報で山岳スキー競技会のことは知っており、山スキー愛好者の一人として、山岳スキー競技とは一体どんなものなのだろうと大いに興味を持っていたので、大西さんの誘いを喜んでお受けした。

　2月中旬、競技会の地元責任者である小林貞幸さんからのスタッフ募集の正式依頼のメールが大西さんを通じて届いた。すぐに私は「参加」の返事を送り、回答書式には「配置希望箇所」の項目があったので、「山中での選手の様子を観察したいため、山中旗門への配置を希望」と書き加えた。3月下旬、役員配置の詳細が小林さんより届き、私は⑤班のＡ旗門担当であることを知った。Ａ旗門は今回の競技コース中の最高地点である西鵯のピーク（1930ｍ）に設置されることになっていた。競技会スタッフではあるものの、自分も山スキーで行動できるのを嬉しく思った。

　3月末に定年退職となり、4月からはフルタイムの再任用で、前任校の隣にある安芸府中高校に転勤となり、1日・2日と出勤後、3日は休みが取れることになったので、2日の夕方に広島を出発した。役員スタッフの集合日時である4日11時に間に合うには、途中で仮眠を取るとして、3日の夕方に広島を出発すれば可能ではあったが、余裕を持たせるためと、せっかく遠方まで行くので、できれば行きがけにどこかに立ち寄りたいとも思ったからである。

　立ち寄ることにしたのは、福井・岐阜県境の能郷白山（1617ｍ）であった。深田久弥が郷里の福井からも百名山として荒島岳（1523ｍ）を選んだとき、その対抗馬となっていたのが能郷白山である。「山の気品のある点では、荒島岳が上だった」とのことで200名山に甘んじることにはなったが、能郷白山が登頂意欲を掻き立ててくれる山であることに変わりはない。実は昨年（2014年）4月12日に初めて荒島岳を訪れ、スキーで山頂から滑降したのであるが、翌日には能郷白山もスキーで登下降する計画であった。荒島岳から下山後、国道157号線を通って岐阜県に入り、道の駅「うすずみ桜の里」で車中泊をしようと考えていた。157号線に入り、真名川ダムのあたりで通行止めの看板が出ていたが、除雪されていたのでそのまま進んで行くと、果たして県境の温見峠で除雪は終わり、岐阜県側は全く除雪されていなかった。したがって「うすずみ桜の里」計画は変更を余儀なくされ、また、峠一帯の積雪も意外に少ないのに失望し、計画を大幅変更して、翌日は鳥取県・大山（三ノ沢）に向かうべく、帰路に就いたのだった。

　昨年より10日ほど早い時期で、また今年は積雪も多いようなので、積雪量は問題なかろうと踏んでいたが、逆に今年は雪が多すぎた。除雪は温見峠の13kmほど手前（巣原トンネル出口）で終わっていた。さて、どうしたものか。ともあれ、スキーで残雪の国道を行けるところまで行き、できれば能郷白山の斜面に取り付いてみようと考えた。登路は温見峠の約3km手前になる、山頂から北北西に伸びる尾根を考えた。そうして3日朝8時前に車を置いて出発したが、行けども行けどもなかなか目的の取り付き点には辿り着かず、雨も降り出してきたため、ほぼ3時間たったところで登高（といっても標高差100ｍ弱だが）を断念。ほとんど平坦な下りも2時間少々かかってようやく出発点に帰着。（こんなことならクロスカントリーの軽い板と靴で往復すれば良かったと思ったが、後の祭り…。）あとでGPSの軌跡を見ると、トレースした距離は片道7.5kmばかりであった。かくして能郷白山スキー登山の楽しみは、またしても来年以降へのお預けとなった。

　さて、昼過ぎ、車で移動をはじめ、荒島岳の麓を通過して、九頭竜温泉でまずは汗を流した。やはり昨年よりは雪は多いようで、荒島岳登山口となる勝原スキー場跡（標高350～650ｍ）の斜面にもいくらか雪が残っていた。ちなみに昨年はスキー場跡には雪は全くなく、スキーとブーツはザックに取り付けて運動靴で登って行った。そうして標高1000ｍ位になってようやく雪が現れてきたが、春の柔らかな雪で、さほど危険でもなかったため、そのまま運動靴で山頂まで上がった。そうして山頂で、間近に見える白山の雄大な眺めに感動し、荷物を置いてしばらくは山頂一帯の緩やかな斜面をスキーで遊んだ。そのとき、雪でぬれた運動靴は、暖かい日差しの中、雪面から顔を出している岩の上にちょこんと置いて干していた。すぐ近くには小さな祠もあった。山頂三角点から150ｍほど離れた南東ピークを往復して戻り、さてこれから標高差500ｍのスキー滑降だと意気込んでザックを背負い、山頂北側の急斜面も無事にクリアして、雪の消えかかる1000ｍ付近に降り立った。そしてまたスキーとブーツをザックに取り付けようとして、はたと気付く。「しまった！運動靴を山頂に置き忘れてしまった！」やむなく雪のない道をスキー靴で歩いて下ることになったが、推して知るべし。私はそもそも登山の半分は「修行」だと思っているが（苦労がある程度なければ、楽しみも大きくない）、このときばかりは修行を通り越して、「苦行」になってしまったのだった。

　話が横にそれたが、九頭竜温泉を出発して、九頭竜の道の駅に立ち寄った後は、中部縦貫道から東海北陸道に入り、ひるがの高原SAにて夕食。天気は悪く雨はまだ降っている。その後、高山から安房トンネルを通って、梓川沿いのトンネルの多い道を松本に向けて車を走らせ、長野自動車道下り線梓川SAの一般道側駐車場にて車中泊。

　翌4日7時にSAのレストランで少しリッチなモーニング朝食をとり、7時45分栂池に向けて出発。雨は止んだが、左手の北アルプス連峰が雲の中なのが残念だ。9時過ぎ、栂池観光協会前に到着。すぐに大西さんに出会い、観光協会入口にて日山協の山岳スキー競技担当である笹生さんや長野県山協の小林さんとも挨拶を交わす。11時の役員集合まで時間があり、役員ビブスを着用していればゴンドラ・リフトが無料になるとのことだったので、競技会場の中心となる栂の森まで上がってみることにした。標高1600ｍ前後となるこのあたり、ガスで視界はきかず、しかも小雨模様であった。栂池ハンノ木コースの長いゲレンデを滑降して、11時前に観光協会に帰着し、役員打ち合わせに臨む。

　私が属するＡ旗門グループの他のメンバーは、リーダーの栗原久さん（大町山の会）、春若翔太さん（労山・富山県）、松山信さん（MB(Mount Bully)・長野県）、櫻井奈緒子さん（MB・富山県）で、この日の業務は、Ａ旗門手前の誘導Ｘ（栂の森から栂池自然園に向かう林道途中の1770ｍ地点）からＡに向けての登りのトレースを2本しっかりつけることであった。すでに先行役員の方が20～30ｍ間隔で登りルートの目印となる緑の旗を立てていて、トレースもついていたため、困難な作業ではなかった。（新雪が降ったりすると大変な作業になるのだろうが…。）ただ、我々の班のメンバーは皆さん割と若くて元気であった。60歳になった私は、年齢からすればまずまず体力はあると思っていたが、栗原さん・春若さん・松山さんの3人からはしばらく遅れ、なんとか女性の櫻井さんと一緒にＡ旗門に登ることができただけであった。時計を見ると、標高差150ｍを20分で登っていた。やはり並のスピードではなかった。私の通常のシール登高では、雪の条件が良くても、発汗をなるべく抑えるためもあり30分近くは時間をかけるところだ。（彼らは来年は競技選手として参加するといいかもしれない。）

　Ａ旗門に着いた後は、降りルートの赤い旗を確認しながら滑降。途中、林道下りを経て、あとは長いゲレンデを3～4回ほど立ち止まるだけで、ほぼ一気にゴンドラ山麓駅まで滑降。これも、櫻井さんを含め、皆さんのスピードの速いこと速いこと！スキーが私のみテレマークだったこともあるのだろうが、なんとかあまり離されずに皆さんを追いかけていくのが精一杯だった。山麓駅に帰着したのが14時半前で、16時過ぎからの後着役員を含めての打ち合わせにはまだ時間があったために他の皆さんは再度のゲレンデ滑走に勇んで出かけたが、私は車に戻って一休みすることにした。

　16時から観光協会の3階で開会式が始まるので、その少し前に会場に赴いて選手たちの様子など観察させてもらっていたところ、会場で販売されていた山岳スキー競技の用具に驚かされた。競技の世界の用具はこんなんだ！軽いこと軽いこと。最近流行りのTECビンディングが軽量なのは知っていたが、ブーツも板も軽いのなんの！テレマークスキーがアルペンスキーに対して軽量さを自慢できる時代はとっくに終わったのだと感じたしだい。

　この驚きは、翌日の競技当日、Ａ旗門でシールを剥がし滑走へと移る選手たちの様子を見て、また輪をかけられた。なんとほとんどの選手たちは、シールを剥がすに際して、スキーを履いたまま行うのである！道具もそれがうまくできるようになっている。板の先端に紐でひっかけているシールのトップを外し、あとは横方向に剥がすようにしてやれば、エンドを止めてはいないシールは簡単に外れる。シールの形状もバックカントリーで使うような幅広のものを板のサイドカーブに合わせているようなものではなく、細めでまっすぐな形状になっている。（道理で前日、大会コースの下見で、我々と同じくＸからＡへと登っていた選手が、シール登高で苦労していたわけだ。）なお、テレマーク部門の選手たちの中には、板を後ろに蹴りあげてシールを外す選手もいたが、それも一つの見ものであった。さらに、登高モードから滑降モードへのビンディングの切り替えもかかとのステップインでできるようになっていた。

　大会当日、2周してくる選手たちをチェックしながら、3時間少々小雨降るＡ旗門に立っているのはいくらか辛くもあったが、競技の様子への驚きと頑張る選手たちの姿が、その苦労を和らげてくれた。全選手通過後は、私は登り目印の緑旗を回収しながら、さらにＸ地点からは、昨日はロープウェイで通過したためトレースしていなかったルートもたどり、大西さんをはじめとする本部役員の待つ「カフェテリア栂の森」に無事帰着して、昼食券を受け取り、暖かい建物の中の幸せなひと時を過ごした。2階で行われていた表彰式の様子も少し見物させてもらい、広島に帰るのが遅くなってはいけないので、他の皆さんよりは少し早めに下山させてもらった。

15時に、前日の宿舎であった栂池高原ホテルの駐車場を出発。名古屋や京阪神の混雑を避けるべく糸魚川ICから北陸道・舞鶴若狭道経由で帰ることにした。その日のうちに広島県の福山（糸魚川から640kmほど）まで帰るつもりでいたが、やはり疲れていたのか、兵庫県の三木SA・岡山県の瀬戸PAでそれぞれ2時間・1時間半ほどの仮眠をとり、福山SAには6日の午前3時過ぎに到着、そこでも2時間ほどの仮眠をとり、広島市南区の自宅に到着したのは6時半過ぎとなった。1学期の始業式となるこの日には私自身の着任式もあり、7時半には自宅を出て勤務先へと向かった。

　来年、役員スタッフとしてまた参加したいと思うかどうか、今は何とも言えないが、今まで知らなかった世界の山岳スキー競技なるものに触れさせていただき、長野県山協・日山協の方々には大変感謝している。そして役員スタッフとしての大会参加を通じて、多くの方々と知り合いになれたことがとても嬉しかった。競技の運営は大変なことではあるが、それを通じていろいろな方と知り合いになれることは何にも代えがたい。このことはインターハイ登山大会しかり、広島で長年開催しているトレラン大会の比婆山スカイランしかりであろう。バックカントリーのハイシーズンとなる5月中下旬の開催であるため、失礼することの多かった比婆山スカイランであるが、今年は久し振りに参加せねばならないという思いにさせられている。